

## 長唄のテンポの定量的分析

矢向正人

本稿は、長唄の一曲全体をとおしたテンポ変化を定量的に測定することにより、長唄演奏にみるテンポの特徴を調べた。長唄《越後獅子》の1950年代以後のレコード録音を分析対象とし、一曲をとおしたテンポ変化と演奏家ごとのテンポの違いがどのように相関するかを考察した。分析した録音は、(十四世杵屋六左衛門-六世杵屋勘五郎)、(七世芳村伊十郎-山田抄太郎)、(松島庄三郎-杵屋五三助)、(今藤長之-芳村伊十七)、(芳村五郎治-杵屋栄次郎)、(宮田哲男-杉浦弘和)、(西垣勇蔵-杵屋弥三郎)、(和歌山眞五郎-杵屋佐吉)によるレコード録音である。波形編集ソフトCubase SXを用いて一曲をとおしたテンポ変化を測定したうえ、統計ソフトSPSSを用いて分散分析と多重比較法とを行ない、演奏家ごとのテンポの違いを考察した。分析の結果、まず、現行長唄譜である三味線文化譜と長唄新稽古本のテンポ指示が分析したテンポの実測値と一致しない箇所はクドキに多いこと、大正15年刊の吉住小十郎(編)五線譜にみるBPM指示は分析したテンポの実測値よりもかなり速く、この傾向は地歌を引用した箇所でも顕著であること、どの演奏も一曲をとおしてテンポが加速していることを確かめた。一方、演奏家の特徴が大きくあらわれる箇所と認識されていた浜唄では、事前の予想に反してテンポのばらつきが少ないことがわかった。また、多重比較法の結果、(十四世杵屋六左衛門-六世杵屋勘五郎)と(宮田哲男-杉浦弘和)の類似、(宮田哲男-杉浦弘和)と(西垣勇蔵-杵屋弥三郎)の類似が見いだされ、舞踊を伴わない演奏様式による《越後獅子》では、演奏によるテンポ変化のばらつきが少ないことがわかった。